平成 27 年度講演会

小児外科ってな一に?
―これからの小児医療に求められるもの―

学校法人福岡学園理事長
九州大学名誉教授　　水田祥代先生

私たちは、こどもはみんな元気に生まれ、すくすくと育っていくことを願っています。しかし、お母さんのお腹の中に居るときにちょっとしたことで病気になり、治らないままで産まれてきたり、元気で産まれても知らないうちに病気になったり、事故にあったりします。そのような子供たちを手術などで治すのが小児外科の役目です。

昔は、こどもの病気、とくに外科の病気では治療はもとより、診断さえはっきりしませんでした。しかし、過去 100 年、特に最近の 50 年くらいの間に小児外科学は素晴らしい進歩発展をとげ、たくさんの病気の原因究明や治療法の開発が進み、単なる救命から QOL を考えた治療が可能となりました。

しかし、学問的な進歩やその成果によって救命率は上がりましたが、果たして患者さん達から見た医療環境は良くなったのでしょうか。昔、病院は病気の子どもを隔離するところであり、そのために入院中の生活環境が悪くなっても仕方がないとされていました。特に大学病院では子どもという配慮は少なく、大人と同じ環境の場合がほとんどでした。

留学したイギリスの小児病院や学会などで訪れるチャンスがあった欧米の小児の医療施設はパステルカラーで統一された建物で、樹木の緑が映える庭にはいろんな動物のオブジェがあり、病院の中は壁紙も子どもらしい絵や色で満ち、角が無いすべてが丸みを帯びた曲線を持った構造になっている病院で、病んだ子ども達やその家族が心地よく過ごせる場所であり、また重症な患児や長期入院中の患児のために家族が遠くからきたりあるいは週末を家族と一著に過ごすための宿泊施設が整備されていることなどを知るたびに、「病院は病気の子ども達を隔離するところではなく、病気と闘いながら普通の生活が送れるような場所であるべきである」という想いは強くなっていきました。この想いをこめて九州大学病院に小児医療センターを開設しました。この小児医療センターは小児に関する各科の医師が診療科の枠を越えて結集し、高度先端医療を含む総合的小児医療をめざし開設したものですが、その建築に当たっては「森のイメージ」で設計し、森の動物たちとの楽しい会話が聞こえてくるような待合室や廊下、プレイルームなどにくわえ、子ども達が新鮮な外の空気も吸えるようにライトコートに庭も作りました。また、家族と一緒に過ごせるファミリーハウスも建設しました。

歯科大学に来てからは、小児における医科と歯科の連携、特に小児がんの治療をうけた

こどもたちの歯の問題に関して情報発信をしています。

現在我が国では小児医療に携わる人が慢性的に不足している状況ですが、子どもの成長を見守る楽しいことを何故嫌うのか?と理解に苦しみます。どうしたら次の世代を担う意欲あふれた若い医療人に小児医療の素晴らしさ、楽しさを理解してもらい、人生の知的冒険の途に送り出せるかと模索しています。

今回は小児外科が取り扱う代表的な疾患の治療の変遷と進歩について自験例を中心にお話しさせていただきます。

略歴

昭和３５年　３月	長崎県立長崎東高等学校卒業
昭和３５年　４月	九州大学医学部入学
昭和４１年　３月	九州大学医学部医学科卒業
昭和４１年　４月	米空軍立川病院にてインターン
昭和４２年　４月	九州大学大学院医学研究科入学
昭和４２年　６月	第４２回医師国家試験合格
昭和４３年　３月	九州大学大学院医学研究科休学（英国留学のため）
	英国リバプール大学付属小児病院医師
昭和４５年　４月	九州大学大学院医学研究科復学
昭和４８年　４月	九州大学医学部付属病院医員（第２外科学講座）
昭和４９年　４月	九州大学医学部付属病院助手（第２外科学講座）
昭和４９年１２月	九州大学大学院医学研究科修了
	医学博士（九州大学　医博　甲０００４７４号）
昭和５４年１１月	九州大学医学部付属病院講師（小児外科）
昭和５８年１０月	福岡市立こども病院外科部長
昭和６１年　４月	九州大学医学部助教授（小児外科学講座）
平成　元年　９月	九州大学医学部教授　（小児外科学講座）
平成１５年　４月	九州大学評議員
平成１６年　４月	九州大学病院長
平成２０年１０月	九州大学理事・副学長
平成２３年　８月	学校法人福岡学園常務理事
平成２７年　３月	学校法人福岡学園理事長　　現在に至る

赤ちゃんからの小児歯科でわかったこと
「矯正も予防の時代―筋肉の不思議」

東大阪市・中原歯科
中原弘美先生

かつて小児歯科には虫歯の洪水と言われた時代がありましたが、齲蝕は先人の先生方の努力により、あるいは、増加した歯科医のマンパワーによって減少しました。
けれども今度は、不正咬合の洪水の時代ともいうべき歯列・咬合の不正が蔓延する時代が到来し、咀嚼嚥下能力の低下は、学校給食の現場での誤嚥・誤飲や、地域の健診や学校健診では発見できない隣接面齲蝕の増加を招いてきています。

物事には始まりがあり、病気には病因があります。赤ちゃんから子ども達の口腔内を診ることにより、不正をおこしてくる様々な要因もわかってきました。
現代の子ども達に現れている新しいタイプの不正咬合とは何か？そして、それは社会的な環境や生活習慣の変化による現代の若い女性達の体のおかしさや筋力の弱さに原因がある場合もあり、胎内を 4Dで観察できるようになった今、赤ちゃんの胎内での成長発育のし難さにもその要因があることが解ってきました。
反面、生後わずか１か月の間に口腔領域は素晴らしい成長発育をすることもわかってきました。

故桑原未代子先生が最後まで憂いていらっしゃったこと「現在の乳歯咬合の不正児は、臨床の場で咀嚼を指導したり、矯正治療を行っても口から健康が維持できるようになるだろうか？私には悩みが絶えない。―中略―　私が恐れていることは、口の機能により、健康が失われたり、特に子どもでは幼児期の機能を十分獲得しなかったため、早老化や健康喪失の原因を作りはしないか？ということである。このようなことが発症すれば小児歯科医の責任は何と言われようか？」―赤ちゃん歯科ネットワーク 2014. Vol.1 No.1 より抜粋
後に続く私達にできることは何か？「どうしてだろう？」日々疑問に思う現代の子ども達の口腔機能と形態のおかしさや問題点に対する私なりの取り組みをお話し、皆様のご意見を伺いたいと思います。

略歴　1982 年　岐阜歯科大学卒業
1983 年　東大阪市中原歯科医院開院
1995 年　日本小児歯科学会認定医
2006 年　日本小児歯科学会専門医
2011 年　日本小児歯科学会専門医指導医　歯科医師 臨床研修指導医
2013 年　歯学博士取得